

日時・会場

日時：2021年1月22日（土）13:00 - 17:20

会場：オンライン開催（zoom ウェビナー形式）

プログラム

13:00 - 13:05 開会挨拶 吉岡 祥一（神戸大学都市安全研究センター センター長）

公募研究発表（発表 30 分、質疑 10 分）

13:05 - 13:45 被災地の 10 年と、レジリエンス概念の再検討
梅屋 潔（神戸大学国際文化科学研究科 教授）

13:45 - 14:25 東日本大震災 10 年 被災歴史資料と震災資料保存活用の新展開
奥村 弘（神戸大学人文学研究科 教授）

14:25 - 15:05 沿岸域災害の居住移転によるリスク変容評価と土地利用再編
近藤 民代（神戸大学工学研究科 准教授）

15:05 - 15:15 休憩

15:15 - 15:55 「記憶の街ワークショップ」の 10 年と成果の現状
槻橋 修（神戸大学工学研究科 准教授）

15:55 - 16:35 東日本大震災からの下水道施設の震災復興プロセス
鋤田 泰子（神戸大学工学研究科 准教授）

16:35 - 17:15 新型コロナ後遺症における内分泌機能障害のスクリーニング法の開発と疫学調査
山本 雅昭（神戸大学医学研究科 特定助教）

17:15 - 17:20 閉会挨拶 飯塚 敦（神戸大学都市安全研究センター 副センター長）

講演要旨

被災地の 10 年と、レジリエンス概念の再検討

梅屋 潔（神戸大学国際文化学研究所 教授）

一口に 10 年というが、被災地では、この間たくさんの変化があった。さまざまな状況を紹介しながら、震災を機に一躍使用頻度の上がったレジリアンスという概念を再考する。また、現在求められているのは何か。南アフリカ・ケープタウン大学との共同研究の成果も踏まえて、被災地の 10 年の一側面を検討したい。

東日本大震災 10 年 被災歴史資料と震災資料保存活用の新展開

奥村 弘（神戸大学人文学研究科 教授）

東日本大震災か 10 年が過ぎ、阪神・淡路大震災以来展開してきた被災歴史資料と震災資料の保存と活用について、大きな進展が見られた。ここでは、その広がりを持つ意味をあきらかにすることで、減災・防災において重要な記憶の継承という課題について述べてみたい。

沿岸域災害の居住移転によるリスク変容評価と土地利用再編

近藤 民代（神戸大学工学研究科 准教授）

沿岸域災害の復興期には居住移転による安全性、持続性、住み良さを向上させていく必要がある。インドネシア・中部スラウェシ地震や東日本大震災を事例として、居住移転によるリスク変容とその評価手法を報告する。リスクの不確実性を前提とした土地利用再編計画の進め方について考える。

「記憶の街ワークショップ」の 10 年と成果の現状

槻橋 修（神戸大学工学研究科 准教授）

2011 年 3 月、震災の直後から構想し活動をはじめた被災地の復元モデルによる復興支援活動「失われた街」モデル復元プロジェクトは、大変多くの皆さんに支えられ、震災から 10 年を経て現在も活動を継続しています。各地で行なった被災前の記憶をモデルに集める WS「記憶の街ワークショップ」を計 50 回以上開催してきました。現在は復興が進む各地においてアーカイブ施設などの各施設で展示が行われています。講演では 10 年の成果と現状、そして今後の展望についてお話しします。

東日本大震災からの下水道施設の震災復興プロセス

鎌田 泰子（神戸大学工学研究科 准教授）

東日本大震災では太平洋沿岸にあった下水処理場は津波によってほぼ壊滅状態となった。水道や電力などの他のライフラインと比べて、一般的に下水道は地震からの本復旧の完了までに長期間を要す。被災した住宅地域の復旧、上水道の供給再開とともに汚水が処理場に流入したが、多くの処理場ではすぐに通常の機能が回復せず、応急対応しながら本復旧が進められた。

公共土木施設の災害復旧においては原形復旧が基本となるが、津波によって沿岸の処理区域が被災する場合、処理人口の回復を災害直後に見通すことは難しく、震災前の施設計画（処理人口、処理能力、処理方法）が必ずしも最適とは限らない。震災から 10 年が経過し、被災地での下水処理場や下水道システムの復旧状況を調査した。今後の下水道システムの事前復興計画の策定に資する段階的復旧の方法やシステムの最適化が図られた事例を紹介する。

新型コロナ後遺症における内分泌機能障害のスクリーニング法の開発と疫学調査

山本 雅昭（神戸大学医学部附属病院 特定助教）

COVID-19 の急性期症状からの回復後に多彩な症状が遷延する「新型コロナ後遺症」と呼称される病態が注目され深刻な社会問題になりつつある。我々は最近、重症 COVID-19 回復後に様々な内分泌臓器に異常を呈する症例を経験し報告した。ホルモンは生体の恒常性を保つだけでなく、心理・精神面にも大きな影響を及ぼすため、ホルモンの分泌異常を有する患者は多彩な愁訴を抱えており、またその愁訴は治療により多くが改善する。新型コロナ後遺症患者が抱える愁訴の一部はホルモン分泌異常で見られる症状と類似点が見られることから、今型コ

コロナ後遺症患者の中にホルモン分泌異常が潜んでいるのではないかという仮説に至った。ただしホルモン分泌異常症の診断は簡易ではなく、ホルモン刺激試験など侵襲的な検査を実施しその結果を解釈することが可能な専門医療機関への受診が必須となる。我々はこれまでに様々なホルモン分泌異常症患者に対して質問紙票を用いてQOL 評価を行ってきたことから、それらを用いることにより非侵襲的にホルモン分泌異常患者をスクリーニングできるのではないかと考え今回の着想に至った。本講演では研究背景と進捗について報告する。